

資源環境経済学特別演習 I 議事録
2018年度 第3回

報告題名(title) :	
クマを守ることが森を救う	
報告者(name) 熊谷 駿	日時 6月7日 午後3時～
所属分野(labo) 環境経済学	場所 第5講義室
座長	議事録担当者
出席者 井元、小山田、冬木、高篠、伊藤（房）、石井、水木、伊藤（航）、王（竜）、小林、石塚、Sefat E-Zerin、王（聰）、熊谷、唐、長尾、仁井田、楊、鄒、Boris Kaido、大鐘、三浦、ムシエ、孟、山田	
報告要旨(Abstract)	
<p>【研究背景】</p> <p>自然を保護することは、人間存在にも深く関わる課題であると考えられる。</p> <p>また、人間も生き物である以上、固有の生理・成長速度がある。</p> <p>しかし機械化・効率化が進んだ現代では、速さ（スピード）をどこまでも追及しようとしているように感じる。それは、人間という生き物の身の丈に合っているであろうか、そのスピードについていくことができず破綻することはないのだろうか？</p> <p>それに対して、農業や林業は自然が相手であり、人間が作物の生長を支えていると捉えることができる。ともすれば、自然のスピードに人間が合わせているのだから、スピード超過を防ぐことができているのかもしれない。このような点から「人間と自然のつながり」は重要であると考えられる。</p> <p>実際、大雨洪水や台風、土砂崩れ、鳥獣被害といった自然との付き合い方には難しさがある。</p> <p>その実例として、ツキノワグマを挙げ、その生育環境である森林及び森林を扱う林業に着目する。</p> <p>最後に、研究方法の案や目的について言及する。</p>	

質疑・応答(Q & A)

①M2 仁井田

Q: 「クマが森をよくしてくれる」とは、具体的にどういう状態なのか。クマがいることで、人間が森に対して何かする、ということか。

A: クマが森に居ることで、例えば、種子が散布されることによって森林の多様性が増すというような可能性がある、という意味である。

②M1 孟

Q: 研究の方法、あるいは手段をもっと詳しく説明してもらいたい。

A: 例えば4人のプレイヤーがいたとして、3人は人間で、1人はクマの役を演じ、クマのつもりになってゲームをする。その内容についてはまだできていないのでこれから考えていくが、ゲームの中で疑似体験することを通じて、クマと人間のかかわりについて考えるきっかけとなることを期待している。

③M1 大鐘

Q: RPGを通して自然の繋がり問う観点から不便益について考えるきっかけを与えているが、具体的なプレイヤーはどういったものを想定しているのか。

A: 現段階では決まっていないが、通例で言えば学部一年生になる可能性が一番高い。

Q: なぜ学部一年生にプレイヤーとして参加してもらうのか。

A: 特別一年生がいいということはないが、3,4年生次に就職活動などを考える際、ただ単にお金ベースの考え方で将来を決めようとするのではなく、「不便益」という、お金だけではなく心の豊かさのような形で、就職先など自分の将来の生き方というものを考えることにもつながればいいという思いがある。

Q: このリサーチで軸になるものというのは、「不便益」の意義についてなのか。それとも「自然とのつながり」を摸索することなのか。どちらの方に重きを置いているのか。

A: 研究会の直前までは目的の「自然とのつながり」と「不便益」が逆で、「不便益」という観点から「自然とのつながり」について考えるようになっていたが、これはどちらも(「自然とのつながり」の観点から「不便益」を考えると)言えて、どちらもやりたいという自分でも完全には決まっていない状況である。

Q: 現段階では「自然とのつながり」に重きを置いているということか。

A: 生き方などの面では「不便益」の方を軸におきたいかもしれないが、はっきりとは決まっていない。

④M1 山田

Q: 個人的に問題意識や研究背景、不便益のよさには共感できる。その上で、論理の中にその世界観を当てはめてしまうと、研究の方法が飛躍している感じを受ける。自然を制御できないものとして捉えて、それに対して人間がどうあるべきか、という姿勢みたいなものという理解でいいか。

A: 自然を相手にすること自体、機械など(を相手にすること)に比べたら不便であるが、自然を見ると落ち着くといったような、よくわからないけれども誰しも感じるような益がある、といったことである。

⑤D2 石塚

Q：タイトルは「森を守ることでクマと共存する」といったものになるべきではないか。人間が働きかけている対象は森なので、現在のタイトルは変だ。それと「人間と自然とのつながり」というのがしっくりこない。つながっているのは人間同士で、結局自然というものを管理下に置いている。それが林業においては大事なのだろうが、それをつながりと言っていいのか今一つわからない。この「人間と自然とのつながり」というものをどのように考えているのか、コメントをお願いしたい。

A：タイトルについては、直接的にクマを守ることで森を救うという意味合いではなく、回りくどい言い方ではあるが、クマを守る＝クマの住む生育環境を整備するといった意味で、それは森を守る・整備するという意味なので、ただ「森を整備すれば森は救われる」ということしか言っていないのは確かである。自分自身、タイトルについては改善の余地が大いにあると考えている。つながりに関しては、(卒論の時の図をそのまま用いているので、今回は)別にそれほど深く考えていない。背景として、自分自身の感覚であるが、ほぼ常に機械を手に入れているので、そうではなく、生活の一部として一日のうち数分・数時間でいいから、外を眺めるなど自然について触れる・見るといったことがあるだけで、(問題意識である)スピード超過というものを防げるのではないかと、という気持ちでここにはそう書いた。

⑥井元先生

コメント：クマがなぜ出てくるようになったのかということについて、森を手入れしていないからだと考えているようだが、果たしてそれは本当だろうか。そのところは、既往研究から押さえた方がよい。大井の論文を引っ張っているが、大井はクマの生態、特にブナ林との関係について研究している。森林総研からもクマの生態とブナ林の関係、それと森林の手入れについての研究がたくさんあるので、ぜひ読みこんでほしいと思う。

⑦伊藤先生

コメント：研究の方法について、クマと人間のRPGというのもありなのだろうが、別なアプローチで、不便益を実践している人たちとなかなかそういったことに気づかない人たちのデータを集めて比較研究するというにもチャレンジしてみたい。